

第十七回 孔明一たび周公瑾を気らす、趙子龍 計もて桂陽を取る

— 荊州争奪戦（一） —

（前回から今回まで）

「赤壁の戦い」では手を携えて曹操と戦った孫権と劉備でしたが、戦後は、荊州の支配をめぐって両者は対立するようになります。

赤壁で敗退した曹操は、荊州のおさえとして曹仁と夏侯惇をそれぞれ南郡と襄陽に留め、いざというときの計略を書き残して、自らは北方へ帰っていきます。そして、周瑜は南郡の攻略を目指し、曹仁と激戦を繰り返しますが、矢傷を受けて重傷を負ってしまいます。しかし、周瑜は自分は矢傷がもとで死んだと喧伝し、曹仁をおびき出して南郡を奪おうとします。

（本文抄）

「都督、お具合はいかがですか」と程普がたずねると、周瑜は言った。

「これは私の計略だ」

「なんと、計略ですと」と程普。

「私の傷はそれほど重傷ではない。こんなふうにしてみせたのは、やつらを欺すためだ。私
がすでに死んだと言われれば、曹仁は必ず夜討ちをかけて来るだろう。そこで、伏兵を置いて
討つてできれば、曹仁を生け捕りにできる」と周瑜。

ただちに陣幕のなかで哀悼の声をあげさせたので、みな都督は矢傷が破裂して亡くなった
のだと言いつつ合った。

さて、曹仁は、周瑜は矢傷が破裂して落馬したから、死ぬにちがいないと話していると、
その最中、「周瑜の陣営から十数人の兵士が降伏して来ました」と報せが入った。

曹仁は呼び入れてたずねると、兵士が言うには、

「今日、周瑜は矢傷が破裂し、陣営に帰つてすぐ死にました。今、諸將は喪に服しています」
曹仁は、周瑜の陣営に夜討ちをかけることになり、陳矯に城を守備させると、残りの兵
士全員を引き連れて出撃した。

しかし、周瑜の本陣まで来ると、人のいる気配はなく、ただ旗さし物や鎗が立ててあるだ
けだった。曹仁は畏にはまったと悟り、急いで退却しようとすると、四方からいつせいに呉
軍が討つて出た。曹仁は十数騎を率いて包囲網を突破し、敗残の軍馬を率いて逃走した。

周瑜は、ただちに南郡城に殺到したが、見れば旗さし物が立ち並んでいないか。

と、物見櫓ものみやぐらの上に一人の大將が現れて、大声で叫んだ。

「周都督よ、軍師の命令を受け、すでにこの城をいただいた。わたしは常山じょうざんの趙子龍だ」

周瑜は激怒し、城を攻め取れと命令したものの、城壁の上からは矢が射かけられた。

やむなく、周瑜は諸將と協議し、先に荊州と襄陽を奪ってから、そのあと南郡を奪い取るうと、相談がまとまった。

そのとき、早馬が来て報しらせるには、

「諸葛亮が偽の使者をやり、救援に来るように言つて荊州の軍勢を動かし、その隙に張飛に荊州を襲わせました」

すると、また別の早馬が来て報せるには、

「諸葛亮は使者をやり、曹仁が救援を求めていると騙だまして、襄陽じょうようの夏侯惇かこうしんをおびき出し、その隙に関羽に襄陽城を奪い取らせました。荊州と襄陽は、どちらも劉備に取られてしまいました」

周瑜はあつと叫び声をあげ、矢傷が破裂した。

周瑜は曹仁との戦いで重傷を負いますが、それを逆手にとつて曹仁を打ち破つたものの、その隙に、諸葛亮が南郡・荊州・襄陽を次々と占領してしまします。

(本文抄)

さて、周瑜は諸葛亮に南郡を目の前で奪い取られ、また荊州と襄陽も奪われたと聞くと、かつとなつた拍子ひょうしに矢傷が破れて気を失い、しばらくして蘇生そせいした。

周瑜は言った。

「わしは、これから出陣してやつと雌雄しゆうを決し、奪い返してみせるぞ」と周瑜。

「ここはしばらく胸におさめ、私が玄德と会い、道理をもつて話してみましよう。それでも聞き入れなければ、そのとき、力づくで動かしてもよいではありませんか」と魯肅。

そこで、魯肅は荊州へと向かつた。

魯肅は挨拶がすむと、諸葛亮に言った。

「曹操が百万の大軍を率い、江南に攻め来たつたのは、実は皇叔こうしゆく（劉備のこと）を滅ぼそうとしたからです。それを退け、皇叔の危急きききゆうをお助けしたのは、わが呉の軍勢です。であれば当然、荊州の九郡はすべて呉のものです。にもかかわらず、皇叔が術策じゆつさくをもつてこの地

を横取りし、大きな犠牲をはらった呉をよそに、利益をひとり占めにするのは、あまりにも理屈に合いません」

『物は必ず主のもとに帰る』と言うではありませんか。荊州の九郡は呉の領土ではなく、劉表どのが治められたもので、わが君は劉表どこの弟です。劉表どのは亡くなられたが、ご子息がおられますから、叔父が甥を助けてこの地を治められのに、なんの不都合もありません」と諸葛亮。

「もし劉琦どのがこの地を領されるのなら、話はわかります。いま劉琦どのは江夏におられ、ここにはおられないはずですが」と魯肅。

諸葛亮は、「劉琦どのをこちらへ」と命じた。

すると、劉琦が、二人の従者に抱きかかえられて現れ、魯肅に、「病気のためご挨拶にもできず、ご無礼いたしました」と挨拶をした。

魯肅はあつけにとられ、しばらく言葉をうしなしたが、しばらくして諸葛亮に、

「劉琦どのがお亡くなりになったら、どうなさるのか」

「劉琦どのがおられる限り、ここを手離すことはありませんが、おられなくなったら、話はべつです」と諸葛亮。

「ならば、劉琦どのがお亡くなりになったときは、必ずわが呉に返してもらいたい」と魯肅。「しかと承知しました」と諸葛亮。

魯肅は本陣に帰り、このことを周瑜に詳しく報告した。

すると、周瑜は、

「劉琦はまだ子供ではないか、簡単に死ぬはずがない。いつ荊州を取り戻せるかわかったものではない」

「見たところ、劉琦はげっそり瘦せて顔色も悪く、息をするのも苦しそうな様子でした。あと半年とはもたないでしょう。それを待つて荊州を引き取りにいけば、劉備も言い逃れできないでしょう」と魯肅。

(解説)

劉備が奪い取った三城の返還を求める魯肅に対し、諸葛亮は、亡き劉表の長男劉琦を押し出して荊州支配の正統性を主張し、魯肅を追い返してしまいます。

諸葛亮は、『三国志演義』では天才軍師として描かれますが、実際の諸葛亮は、陳寿がりんきおうへん「臨機応変の軍略には長じていなかったと思われる」と評したように、抜きこんだ軍事指揮

官というわけではありませんでした。

魯迅は『中国小説史略』で、『三国志演義』について「諸葛の知謀を述べて妖怪じみている」と述べています。諸葛亮は史実から離れてスーパーマンのように描かれているのです。そうすると、諸葛亮の相手をして、彼のスーパーマンぶりを際立たせる人物を登場させねばなりません。それが、呉の周瑜と魯肃です。彼らもまた、史実からかけ離れて描かれます。周瑜と魯肃は、諸葛亮を引き立たせるために、道化のような役回りで描かれます。そして、このパターンが一貫して続いていきます。

『三国志演義』は「七分の实事、三分の虚構」といわれますが、虚構の三分を事実と取り違える間違いを、そこそこの知識人であっても犯していると、清代の学者の章学誠は嘆いています。しかし、読者に虚構を事実だと思わせるのは、それだけ想像力をかきたてる力があります。『三国志演義』にはあるということなので、小説の価値を増しさえすれば減るものではないかもしれません。

さて、長江中流域を手に入れた劉備陣営に、あらたに「馬氏の五常、白眉もつとも良し」と謳われた馬良が加わります。馬良は劉備に、つづいて南の武陵・长沙・桂陽・零陵の四郡を取り、荊州の支配を安定させるよう薦めます。一番近い零陵から始め、次いで武陵、そ

れから桂陽、最後に長沙の順です。

劉備は、自ら零陵を奪い取ると、趙雲に桂陽を攻めるよう命じます。桂陽太守の趙範は、ちようはん最初の衝突で敗れると簡単に抵抗をやめ、趙雲に投降します。

(本文抄)

趙雲は陣營を出て迎えた。趙範は言った。

「將軍の姓は趙、私の姓も趙です。將軍は真定しんてい県のご出身であり、私も真定県の出身です。もし、兄弟の契りを結ばせていただければ、まことに幸いです」

趙雲は喜び、生まれた年を告げたところ、二人は同じ年だった。ただ趙雲のほうが趙範より四か月年長だったので、趙範は趙雲を兄と呼んだ。

翌日、趙範から趙雲に、入城して住民を安堵あんどさせてほしいとの要請ようせいがあった。

趙雲が、五十騎だけを率いて城内に入ると、趙範は趙雲を招待して酒宴を開いた。

趙範は奥の部屋に趙雲を誘うと、一人の女性を呼び入れ、趙雲に酒をすすめさせた。見れば、喪服もふくを身につけているが、絶世ぜっせいの美女だった。

趙雲は趙範にたずねた。

「こちらはどなたですか」

「兄嫁の樊氏です」

趙雲は、すぐに居ずまいを正した。

樊氏が酒をすすめおわると、趙範は趙雲の側に座らせようとした。しかし、趙雲が辞退したため、樊氏は奥へもどつて行つた。

趙雲はたずねた。

「賢弟はどうして義姉上に、酒をすすめさせたりするのか」

「兄が亡くなつてから三年になりますが、義姉はずっと独り身を通しております。私は再婚するよう勧めておりますが、義姉が申しますには、三つの条件を兼ね備えた方でなければ、私は再婚しません。第一には、文武両道にすぐれ、名声が天下に鳴り響いていること。第二には、威風堂々、並々でない威厳があること。第三には、亡き夫と同じ姓であることです。なんと、こんなうまく合う話があるでしょうか。尊兄はまさに威風堂々、名声は天下に響き、しかも亡き兄と同姓でいらつしやいます。まさしく義姉の希望通りです。お嫌でなければ、將軍の妻にしてください、末ながく、おつきあいをさせていただきますと思います」と趙範。

趙雲は、話を聞くと腹を立てて立ち上がり、声を荒らげて言つた。

「おまえと兄弟の契りを結んだうえは、おまえの義姉は私の義姉にほかならない。そんな人の道にはずれたことができるものか」

趙範は恥かしさで顔を赤らめ、答えて言った。

「私は好意で申し上げているのに、それはあんまりな言い方」

そして、左右の者に、切り殺すよう目くばせをした。

それを見てとった趙雲は、趙範を殴り倒すと、馬に乗って城をあとにした。

(※ 趙範は、再び趙雲に戦いを挑むが、反対に生け捕りにされてしまいます。)

趙雲は、早馬を飛ばし劉備に報告すると、劉備は諸葛亮とともに桂陽けいようにやって来た。

趙雲は、趙範を階の下に引きすえた。諸葛亮が問うたところ、趙雲は兄嫁と趙雲を結婚させようとした経緯いきわづらひを話した。諸葛亮は、趙雲に向かつて言った。

「これはなかなかの美事びじではないか。どうして承知されないのか」

「趙範はすでに私と義兄弟の契りを結んでおり、彼の兄嫁を娶めとったならば、人から謗そしられま
す。これが第一の理由です。また、ひとたび結婚した女性が再婚せつごすれば、節義せつぎを失うことにな
ります。これが第二の理由です。さらにまた、趙範は降伏したばかりで、本心はどうかわ

かりません。これが第三の理由です。殿は江・漢（荊州を指す）を平定されたばかりで、そんなときに、私が一人の女性にうつつをぬかし、殿からまかせられた大切な仕事をなおざりにできませんか」と趙雲。

「おまえの大切な役目もすんだのだから、彼女を娶ってやりたいと思うが、どうだ」と劉備。
「天下に女性はたくさんおります。私の名を廃らしてまで、妻を持ちたいなどは思いません」と趙雲。

「男の中の男とは、子龍（趙雲の字）のことだ」と劉備。

（解説）

この場面は、『三国志』趙雲伝の注に引く「趙雲別伝」にもとづいて書かれています。「趙雲のやもめの兄嫁は樊氏といい、非常な美人であった。趙雲は彼女を趙雲に縁付けようとした。趙雲は辞退して、『同姓であるゆえ、あなたのお兄さんなら私の兄と同じことになります』と述べ、固辞して承知しなかった。そのとき、趙雲に彼女を娶るよう勧めるものもあったが、趙雲は、『趙雲はせつぱつまって降伏したにすぎないから、心底はまだ測りかねる。天下には女は大ぜいいるのだから』といい、娶らなかった」と記述しています。

趙雲を、豪胆さとあわせて「道理」と「節操」を重んじる人物として描いています。関羽や張飛とは違ったタイプの武将です。

また、関羽や張飛がそれぞれ、いわば非業の死を遂げているのに対し、趙雲は天寿を全うし穏やかに亡くなっています。『三国志演義』は、第三次北伐に際し趙雲の息子たちが諸葛亮に父親の死をしらせるだけで、その最期を劇的に描くことはしていません。三国志の英雄らしからぬ平凡な死ですが、それだけにかえって印象に残ります。

趙雲の豪胆さについては、すでに、第十回の「趙子龍単騎主を救う」で取り上げました。「長坂の戦い」の混乱の中、趙雲は一人で戦場を駆け回り、甘夫人を救出し、そして糜夫人から阿斗を受け取り保護しています。

『三国志』では、関羽・張飛・馬超・黄忠・趙雲の五人が同じ伝にたてられています。ここから「五虎將軍」といわれるようになるのですが、陳寿は、この五人を劉備軍団の中核人物とみなしていました。しかし、趙雲の順番はいちばん最後です。関羽と張飛につづいて早い時期から劉備につき従い、しかもこれだけの活躍をしながら、他の四人に比べると順位も官位も低いのです。関羽と張飛と比べればやむを得ないかも知れませんが、官位では魏延にも抜かれています。

二一九年、劉備が漢中王に即位すると、張飛が右將軍、関羽が前將軍、黄忠が後將軍、馬超が左將軍に任命されます。いずれも三品官です。趙雲は翊軍將軍という雑号の將軍に据え置かれています。趙雲の活躍ぶりからすると、何かそぐわない感じがあります。

のち第一次北伐の「街亭の戦い」で蜀軍が敗れると、趙雲は見事な退却戦をおこないます。その活躍ぶりに下賜品があるのですが、それを「負け戦なのに下賜があるのはおかしい」と辞退し、国のために使うよう進言して、諸葛亮を感心させています（『三国志』趙雲伝）。

このように、趙雲は「道理」と「節操」を重んじる性格で、関羽がときおり見せる傲慢さや、魏延の自己顕示欲などとは無縁の人物だったと思われれます。ですから、自分の官位にそれほどこだわりはなかったのでしょう。無類の豪胆さを持ち、かつ無欲恬淡とした「男の中の男」ともいえるべき趙雲像が浮かびあがってきます。

趙雲が桂陽を平定した後、つづいて張飛が武陵を平定します。これを聞いた関羽は、最後に残った長沙の平定は自分にさせてほしいと願います。諸葛亮は、長沙の太守韓玄はとるにたりない男だが、黄忠という大將は、年は六十になるが手ごわい相手だといえます。関羽は、かならず黄忠と韓玄の首をとってまいりますと言って、長沙へと進軍します。

関羽は、後に「五虎將軍」の一人となる黄忠と戦い、彼の誠実さを感じ取ります。

(本文抄)

韓玄が城壁の上に立ってようすを眺めていると、黄忠が刀を手に馬を飛ばし、五百の騎兵を率いて吊り橋を駆け渡った。

関羽は年老いた大将が出撃したのを見て、これぞ黄忠だと思い、薙刀なぎなたを小脇に、馬を進めて問いかけた。

「そこに来るのは黄忠ではないか」

「私の名を知りながら、われらの境界を侵すとは小癩こしやくなやつ」と黄忠。

「いかにも、おまえの首を取りに来たのだ」と関羽。

(※両者、力の限りを尽くして、百合ひやくごろう以上戦いますが、勝負がつきません。そこで、両者は一旦引き上げます。)

関羽は内心「老いたりとはいえ、黄忠はさすが評判にたがわぬ勇者だ。百合も戦いながら、まったく隙を見せない。明日は、逃げると見せかけ、ふりむきざまに斬りつけてやろう」と考えた。

翌日、関羽はまた城壁の下まで来て戦いを挑んだ。

黄忠は、再度、関羽と戦いを交えたが、やはり五、六十合戦つても勝負がつかない。両軍の兵士はどつと喝采かつさいした。と、関羽は馬首をめぐらして逃げ出した。黄忠があとを追いつがってきたので、関羽が刀で斬りつけようとした瞬間、後でどすんという音がした。ふりむくと、馬がつまずいたため、黄忠が地面に投げ出されていた。

関羽は馬を返して、大声で叫んだ。

「ここは、しばらく見逃してやる。早く馬を取り換かえて来い」

(※こうして、両者はまた一旦引き上げます。)

黄忠は「明日、負けたふりをして、やつを吊り橋のたもとまでおびき寄せ、射止いとめてみせます」と韓玄にいった。

また黄忠は、「雲長の情義は得がたいものだ。彼は私を殺そうとはしなかった。私も彼を射殺すに忍びない。しかし、射なければ、主命しゅめいに背そむくことになる」と考え、迷って決心がつかなかった。

翌朝、関羽が挑戦に来たので、黄忠は軍勢を率いて城を出た。

三十合余りも戦わないうちに、黄忠が負けたふりをして逃げ出すと、関羽があとを追った。黄忠は昨日、関羽が命を助けてくれたことを恩義に思い、すぐ矢を射るに忍びず、矢をつ

がえないまま弦を引いて音を響かせた。関羽ははっと身をかがめたが、矢は飛んで来ない。なおも関羽が追いかけると、黄忠はまたも空弦くうげんを響かせた。関羽は急いでよけたが、やはり矢が飛んで来ないので、黄忠は弓が不得手ふえてなのだと思い、気を許して追撃した。

吊り橋にさしかかったとき、黄忠は弓に矢をつがえて放てば、狙い通りに矢が関羽のかぶとの緒おに命中した。

そこではじめて、黄忠は百歩離れた柳の葉を射ぬくほどの腕前だが、かぶとの緒を射るとどめたのは、昨日見逃してやったことへのお礼の心からだと悟さとったのである。

かくして関羽は軍勢を率いて退却した。

(解説)

黄忠が引き上げてくると、韓玄は、黄忠が関羽をわざと射殺しやさつしなかつたのだと思い、彼の首を斬ろうとします。そのとき、韓玄のもとに身を寄せていた魏延ぎえんが、韓玄を殺して黄忠を助け出し、関羽のもとへやって来ます。

関羽は、長沙ちやうさに到着した劉備と諸葛亮に、魏延を引きあわせませす。劉備は喜んで魏延を迎えますが、諸葛亮は魏延を斬れと命じます。諸葛亮は、驚く劉備に、魏延が主君を殺したの

は不忠、その領地を他人に献ずるのは不義、また魏延の頭のうしろに反骨（突き出た骨）があり、将来かならず反逆する相なので今のうちに斬るべきだと言います。

かつて、新野しんやにいた劉備が曹操に追われて襄陽じょうようを通過したときのこと、魏延は劉表の子劉琮りゅうそうの部下でしたが彼に叛きそむ、劉備に襄陽を奪取させようとして失敗しています。このため、魏延は逃亡して長沙の韓玄のもとに身を寄せていたのです。

史実での魏延は、後年、諸葛亮の第一次北伐に際し、自ら兵を率いて直接長安を衝く奇襲作戦を提案しますが、諸葛亮はそれを採用しませんでした。そのため、諸葛亮を臆病者と馬鹿にする言動が目立ち、諸葛亮が亡くなると、諸葛亮が生前に定めた指図さしずに従わず、反旗を翻ひるがえします。

ここで、諸葛亮が魏延を殺そうとしたのはフィクションですが、自己顕示欲の強かった魏延の将来を暗示させています。

一方、黄忠は、韓玄が横暴だったにもかかわらず、最後まで裏切ることはありませんでした。そして、関羽とたがいに誠実な人柄を認めあい、後に、劉備軍の中核「五虎將軍ごこしよかん」として活躍することになります。

こうして劉備は、荊州南部の四郡（武陵・長沙・桂陽・零陵）を手に入れました。